

## 立川米軍ハウスの居住者の構築に見る現代居住の要望

主査 松本 正富\*1

委員 谷口 宗彦\*2, 齋藤 芳徳\*1, 大場 光博\*3, 岩下恵美子\*4, 安田 光志\*4, 内園 健\*4

本研究は、東京都立川地区における米軍ハウスについて、その成立と経緯の過程、建築的概要を取りまとめ、ここで居住者の住環境に対する行為、創意工夫やしつらえ全般を“構築”の観点から分析して、現代住宅における住要望を考察することを目的としている。対象としたハウスは、GHQの示した欧米の空間構成を基本とはするものの、民間による伝統的工法や寸法体系に準じたものであった。住まい方の調査からは、玄関の機能を有する空間は従来同様に要望されていること、浴室に関しては和式での入浴を志向しつつも、欧米タイプの浴槽とトイレを1室に納める形式を肯定する傾向を理解した。

キーワード：1) 米軍ハウス, 2) 構築, 3) 居住要望, 4) 現代住宅

### DEMANDS ON CONTEMPORARY RESIDENCE BY USER'S BUILDING BEHAVIORS OF DEPENDENTS HOUSES IN TACHIKAWA

Ch. Masatomi Matsumoto

Mem. Munchiko Taniguchi, Yoshinori Saito, Mitsuhiro Ohba, Emiko Iwashita, Koushi Yasuda and Takeshi Utizono

The purpose of this study is to summarize the history and the construction-outline of Dependents Houses in Tokyo Tachikawa, and to consider demands of contemporary houses from a view point of “building behavior”. The houses are based on the Western space composition which GHQ indicated, while it follows the traditional construction method and measurements system by the private sector. The investigation of the way of living shows that Japanese traditional entrance space is demanded as usual, although bathing in a Japanese style is preferred, it has the tendency to support the Western style to put a bathtub and a toilet together.

#### 1. はじめに

##### 1.1 研究の目的と背景

第二次世界大戦後、アメリカ連合軍の日本駐留のための家族用住居として「米軍ハウス」(Dependents House, 以下DH)が日本の各地に建設された(写真1-1)。これらの住宅は当時のアメリカ側による基本設計指導のもと、その生活水準を満たした空間構成や設備を有するものであるが、日本の建築資材や施工技術において建築されて現在までに至る。一方、戦後日本の近代住宅は、スクラップアンドビルドの歴史を持ち、建設白書<sup>\*1)</sup>によると、建築時期別のストック統計から試算した住宅の寿命は約26年、現存住宅の「平均年齢」は約16年と推測されており、その住空間及び生活形態においても、欧米のものを追従するかたちで急速なる変化をなした。これに比べて米軍ハウスは、1950年前後に計画された空間構成が現

代までほぼ原型のまま維持されており、つまりはそこの居住形態が現在でも十分に通用する形であったことは、大変に興味深い。現在ここでの居住者は、その多くを日本人が占め、先に述べた空間構成と賃貸の物件である事由もあいまって、その住宅の基本的構成を変えることなく、しつらえを工夫しながら生活を続けていることから、居住者による住環境に対する働きかけを調査するには格好の題材と考えられる。

そこで本研究は、1：東京都立川地区<sup>\*2)</sup>における米軍ハウスについて、その成立と経緯の過程、建築的概要を取りまとめること、2：この米軍ハウスにおいて、居住者の住環境に対する行為、創意工夫やしつらえ全般を“構築<sup>\*2)</sup>”と定義して調査分析することから、現代住宅における住要望を抽出して考察することを目的とする。一般に居住者の住要望としては、主に建築的な形態や機

\*1 川崎医療福祉大学 講師  
\*4 工学院大学大学院修士課程

\*2 工学院大学 教授

\*3 工学院大学 特別研究員

能等に関するものであり意識され易い部分（意識的住要望）と、日常の生活行為の工夫での充足や慣れにより意識されにくい部分（内在的住要望）があると考え。そこで、居住者の構築に焦点を当てた分析から、従来では隠れていた内なる要望の抽出を試みることで、より良好な現代の居住空間のあり方を考察するものである。

なお、米軍ハウスに関する既往の研究としては、基地内の共同宿舎を調査したもの<sup>3)</sup>、地区計画の視点から分析したもの<sup>4)</sup>、沖縄の米軍ハウスを対象としたもの<sup>5)</sup>、台湾でのハウスの概要について調査したもの<sup>6)</sup>等があるが、東京都部に所在する立川のハウスを調査したものは見当たらない。

## 1.2 研究の方法

文献から米軍ハウス成立の過程と設計の内容を探るとともに、建物の実測調査を行ない、相互に比較して現実の水準での建築的な概要を捉えた。また、立川地区のうち中神町を対象として、住戸の残存状況を調査し、過去の住宅地図から建設当時の分布を推察して、10年ごとの

写真1-1 米軍ハウス外観

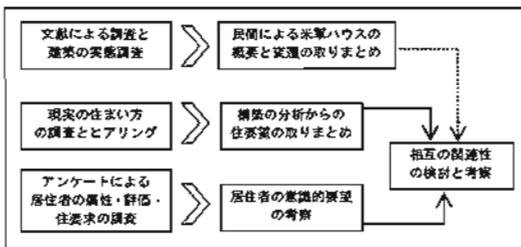


図1-1 研究のフレーム

タイプ	階数	床面積 (m <sup>2</sup> )	LDの構成	寝室数	浴室数 (トイレ付)	専用トイレ	メイド室
A-1	1	89.51	LD・K	2	1		
A-1a	2	87.21	LD・K	2	1		
A-2	1	97.68	LD・K	3	1	1	
A-2a	2	104.11	LD・K	3	1		
B-1	1	112.19	LD・K	2	1		1
B-1a	2	123.39	L・D・K	2	1	1	1
B-2	1	118.98	LD・K	3	1		1
B-2a	2	148.73	LD・K	3	1	1	1
C-1	1	138.86	LD・K	4	2		1

■床面積は1尺=303として、平面図より計算した。

表2-1 住戸の基本タイプと面積および室の構成

住戸数の変遷を追った。

これに加えて、同意の得られた住戸に関しては、現状の住まい方調査とヒアリングを行ない、具体的な構築の様子を捉えた。さらに、アンケート調査を実施して、居住者の評価・満足度・意識的住要望等を調べ、具体的な構築との関連性を探った。以上、研究のフレームは図1-1に示す。

## 2. 立川地区の米軍ハウスの概要と変遷

### 2.1 米軍ハウスの成立と経緯

太平洋戦争終結の後1946年、連合軍総司令部 (GHQ) は日本に対し、約16千戸のDHの建設要請を行ない、これに続けてGHQ管轄下のデザインプランチ<sup>7)</sup>による「連合軍新築住宅工事標準仕様書」を提示して、その具体的な建築上の基準も示した<sup>8)</sup>。これは、当時の日本の建築材料と施工技術によってアメリカ人の生活様式を

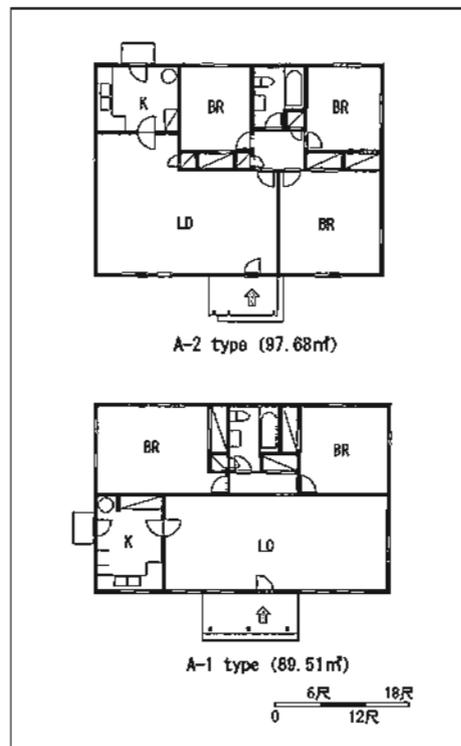


図2-1 DHによる基本プラン

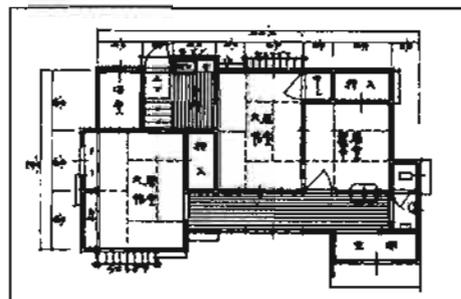


図2-2 1951年度 公庫のプラン

満足することを意図して用意されたもので、延べ面積と平屋・二階建て別に、9種類の平面形が用意された<sup>9)</sup> (表2-1)。AとBのタイプの違いは、主として面積によるもので、Bタイプの方が広く、メイド室も設定されている。また、Cタイプは4寝室と2つの浴室を備え、大家族に対応したものである。1946年からの3年間の計画で東京に3715戸、うち立川には410戸の新築DHを建設したとされているが、1972年には立川基地内に951戸のDHが存在することから<sup>10)</sup>、継続的に建設が行なわれたものと推察できる。

一方、米軍としての立川基地は、極東における空軍輸送基地として、1945年に接收されてから1969年に横田基地へ移駐するまでその役割を果たしたが、この際、主に基地の北西側の民有地にも米軍兵士の居住用の賃貸住宅が建設された。これらは上記に述べた計画的なものとは異なり、不動産的な投機の対象として、民間による個別の建設によるものである。したがって、その平面構成はデザインプランチの示すところを基本とするが、細部における仕様等はそれぞれに異なる側面を持ち、アメリカ人の居住を意識しながらも、当時の日本の在野の建築が色濃く反映されたものである。これらの住宅は、その後の基地の移駐に伴い1970年頃からは多くの日本人の住まいとして利用されることとなる。これ以降、本稿ではこれら民間によるものを“米軍ハウス”として研究の対象とする。

## 2.2 標準設計 (A-1, A-2タイプ) の特徴

この民間地に建設された米軍ハウスは、木造平屋建ての2~3LDKが主で、容積はばらつきあるものの概ね70~90㎡、セメント板葺き切妻屋根の形態を持つ。先に述べた事由で、個々の住宅ごとに多少の違いはあるものの、その規模と平屋の基本構成は標準設計のDHのうちA-1またはA-2のタイプが最も近い(図2-1)。この標準設計について概観すると、1) その平面形は単純な矩形を持つ、2) エントランスのホールのような部分は持たずフロントヤードから直接リビングに入る、3) 公室と私室の領域は廊下でいったん区切られている、4) LDは一体の空間でありキッチンがこれと分離されている、5) トイレ・洗面の水周りも集中したバスルームを1室だけ有する、等が特徴としてあげられる。玄関と浴室周りの構成は現代日本の一般的住宅と異なるものの、主要な居室の構成はほぼ近似していることが理解できる。なお、比較参考まで、当時の住宅金融公庫が刊行した参考図面集のうち、図面頒布の申し込みが最も多かったプラン<sup>11)</sup>を図2-2に示すが、その構成の違いは明らかである。

## 2.3 米軍ハウスの平面構成と増改築の過程

立川周辺の民間地のハウスに関して、11件の平面プランを採取した(2001年8月)。このうち、建設が新しいと思われるものや、事務所使用としているものを除いた8件分について、増改築の部位別に整理したものが図2-3である。

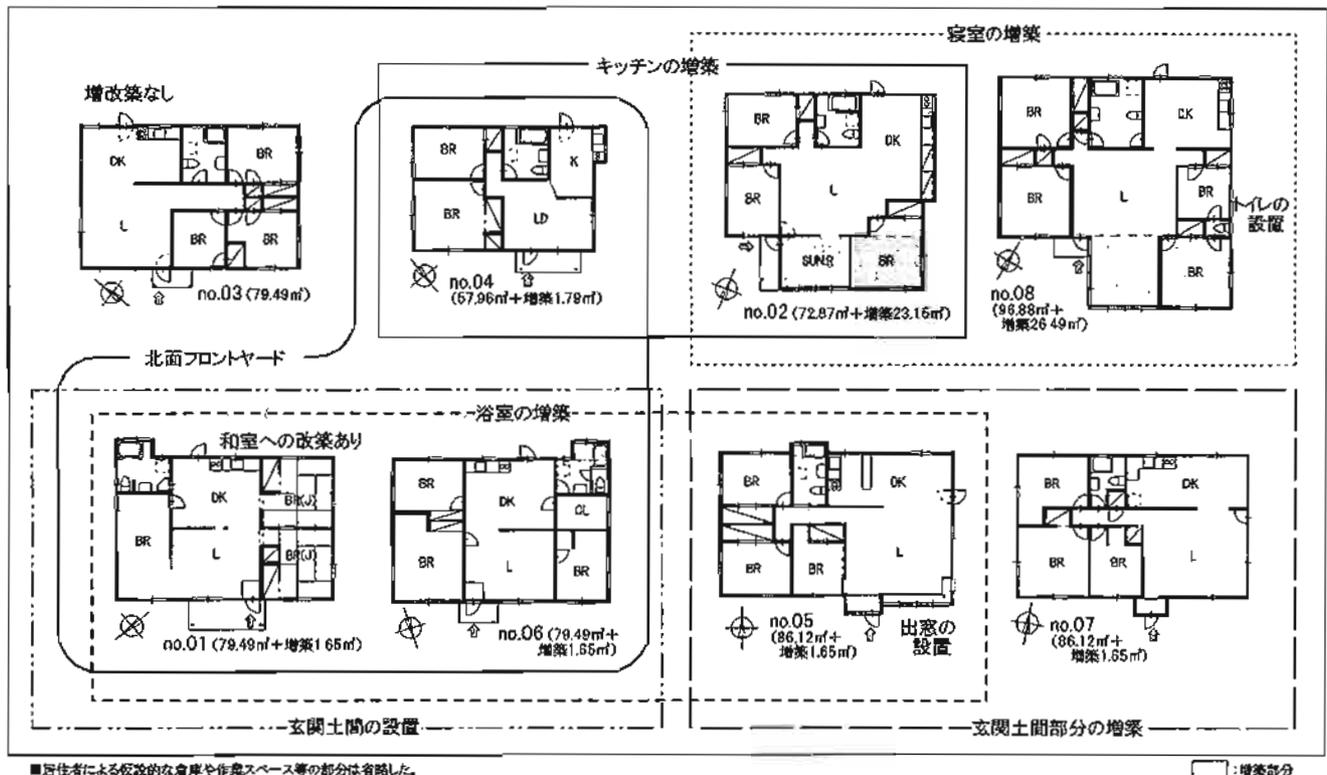


図2-3 増改築の部位別、平面プランの一覧

これらの住宅の建設時の構成を標準設計のものと比較すると、キッチンが独立はしておらずL・DKの形式としている点(no.04以外)と、公室と私室の領域に緩衝スペースが置かれずLDKからの直接の動線が取られている点が相違点としてあげられる。標準設計においては意識的な公私の領域の分割がなされているが、現実の水準ではそこまで明確な意識は持たれなかったようである。もともとAタイプはメイド室を持たないものの、この存在を多少は考慮に入れての設計と考えられるが、現実でのプランからは、これへの対応は必要とされなかったと窺える。また、8事例のうち3事例が北側にフロントヤードを持っており、南面採光の配置計画が絶対的な条件とはなっていなかったことが理解できる。さらに、南面採光のうち3事例は腰窓のみでテラスサッシを有しておらず、全体を通して採光に対しての取り組みは現代のものより弱かったと言えよう。

次に増改築について見てみると、まったく増築を行っていないのは1事例のみであり、ほとんどは何らかの

形で変更を加えているが、これらはすべて居住者によるものではなく、家主によってなされたものである。そのうち、居室を増やす大きな増築は2事例が行なっているが、フロントヤード側へ増築するため、リビングの採光面が奪われ、結果として両者ともに増築部の半分をサンルーム的に利用している。これは、フロントヤードが増築のスペースとできることが一因であるが、リビングを中心とした房状の空間構成においては、パブリック領域からの直接動線を確保するには、建物の前面に増築するしか手段がなかったという理由によるものであろう。洋室から和室への変更は1事例のみであるが、2つの洋室の壁を取り払って続き間を構成しており、米軍ハウスとしては数少ない変更のパターンと言える。浴室に関しては3事例が増築しているが、建設時はタイル貼の現場造作のものであった浴槽自体が、すべての事例においてFRP製等に変更されており、浴槽の耐久性に絡む改築に合わせての事も推察できる。また、アメリカ人の居住の時点では洗濯機の需要は少なかったと見られ、後にこれの置き場を確保する必要性が生じたものと思われる。米軍ハウスは当初の建設の時点から、キッチンセットと浴室等の設備に関しては現在の住宅に匹敵するようなレベルのものを有していたが、主たる増改築がこの設備に関する部位であることは興味深い。住宅設備が住要望としての重要な位置を占めることを示唆する結果とも言えよう。玄関については2事例でポーチ部分を増築して玄関土間としており、別の2事例ではリビングの一部を削って土間を設置している。日本人への賃貸にあたって、靴脱ぎ場を必要と考えた家主の意識が理解できる。



写真 2-1  
解体中のハウス



写真 2-2  
斜め貼の下地板



写真 2-3  
壁、天井の木目地



写真 2-4  
浴室、トイレの仕上げ

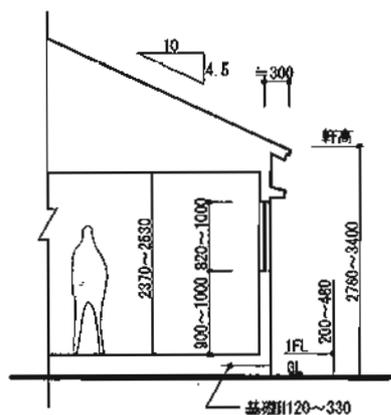


図 2-4 断面寸法の概要

## 2. 4 構法及び仕上げの概要

文献<sup>9)</sup>には当時の設計図面が記載されているが、ここでの寸法体系は日本の“尺”によるものであり、日本人大工による実際の施工の便宜が図られたものである。しかし、標準設計の図面では“間”のモジュールまでには納まっていなかったのに対し、調査したプランはすべて、ほぼ半間ごとのグリッドに納まっており、建築時ではより合理的な寸法の適応化がなされている。また、設計時の基本的な構法については日本の在来軸組であるが、屋根のみはトラス組であり、和洋の構法を混合して採用している。しかしこれも、在野の建築においては大工の慣習に頼るところが大きいと見え、写真2-1にあるように在来構法の屋根も架けられていたようである。この写真から柱・土台・妻梁の構造材が見られるが、これらの寸法は3寸角であり、現在の常識的な部材寸法より1ランク小さいうえ、半製材のものが使用されていた。写真2-2は、別のハウスで外壁の一部が剥離したところの写真であるが、ラス下地板が斜めに貼られており、欧米の枠組構法による構造補強の技術を実際に応用した部分も

見受けられる。つぎに、調査した住宅の高さ関係の寸法の概要を、図2-4に示す。屋根については、調査したもののすべて4.5/10勾配の切り妻であり、この外部形態については、かなり統一した建築がなされていたようである。開口部上端の高さは1800~1900で、天井高は2370~2530であった。基礎に関しては、布基礎で鋼製の換気口は有しているが、基礎高は200程度の低いものも多く、これは土足への対応が関係した結果とも考えられるが、全体を通して建築的な仕様自体があまり高くはなかったようである。総じて、基本的構法については現在の在来工法のものとは比べて特異な点は見あたらず、当時の日本の施工者の技術を主として建築されたものと見受けられる。

表2-2は、主な外・内部の仕上げを示したものである。外部仕上げのうち、屋根：セメント平板瓦、壁：モルタルのうえ吹付け塗装は、ほとんどの資料に統一されたものであった。開口部は木製サッシュであるが、基本形は

表2-2 主な内・外部の仕上げ

仕上り	外装		内装		
	外装	内装	床	天井	
屋根	セメント平板瓦	床	木製フローリング	天井	合板下地、ペイント
軒裏	塗り込め	壁	合板下地、ペイント	壁	合板下地、ペイント
雨樋	塩ビ半丸	壁	畳目地: h1800、縦目地: 2800	天井	合板下地、ペイント
外壁	モルタルの上吹付け塗装	天井	合板下地、ペイント	天井目地挿	縦目地: 1800 x 900 (目地900 x 900)
基礎	コンクリート基礎	床	モザイクタイル貼	天井	タイル貼口110 (h800~1100)
開口部	木製サッシュ	壁	タイル貼口110 (h800~1100)	壁	プラスター塗
ポーチ屋根	カラー鉄板葺	天井	プラスター塗 (ボード下地、ペイント)	天井	プラスター塗 (ボード下地、ペイント)
ポーチ床	モルタル金網				

引違いで、一部に上吊り押し開きの窓が見受けられた。居室の床仕上げはフローリングで、壁・天井は合板下地にペイントであるが、6尺×3尺の合板の継ぎ目は木製の押し縁をつけて処理しているものも多く、これが意匠上の特徴ともなっている(写真2-3)。浴室では、腰までがタイル貼、上部はプラスター塗であるが、浴槽の付け替えられた部分以外は、ほとんどが当時のままの姿を残しており、この仕上げの耐久性の高さを改めて感じるものである(写真2-4)。

## 2.5 中神町における住戸数の変遷

基地周辺すべての民間地に存在した米軍ハウスの総戸数を把握するのは困難であるが、実際にどの程度の米軍ハウスが分布していたかを推察するため、基地西部の中神町を対象として、現存する住戸の調査を行なった(2001年10月)。

1964年の「昭島市商工住宅名鑑」によると、基地西部の中神町は街区までの表記となっているが、その一帯のほぼ全部が“外人住宅”として記されており、基地外部での主要な居住地域の一つであったことが理解できる。次に住宅地図として住戸ごとの居住が具体的に分かるのは1972年以降の住宅地図<sup>12)</sup>であるため、ここに記述されているアメリカ人居住の住戸を米軍ハウスとして推定し<sup>14)</sup>、ほぼ10年毎の変遷を住宅地図上で追うとともに、同地区に現存する住戸数の調査を行ない、まとめた

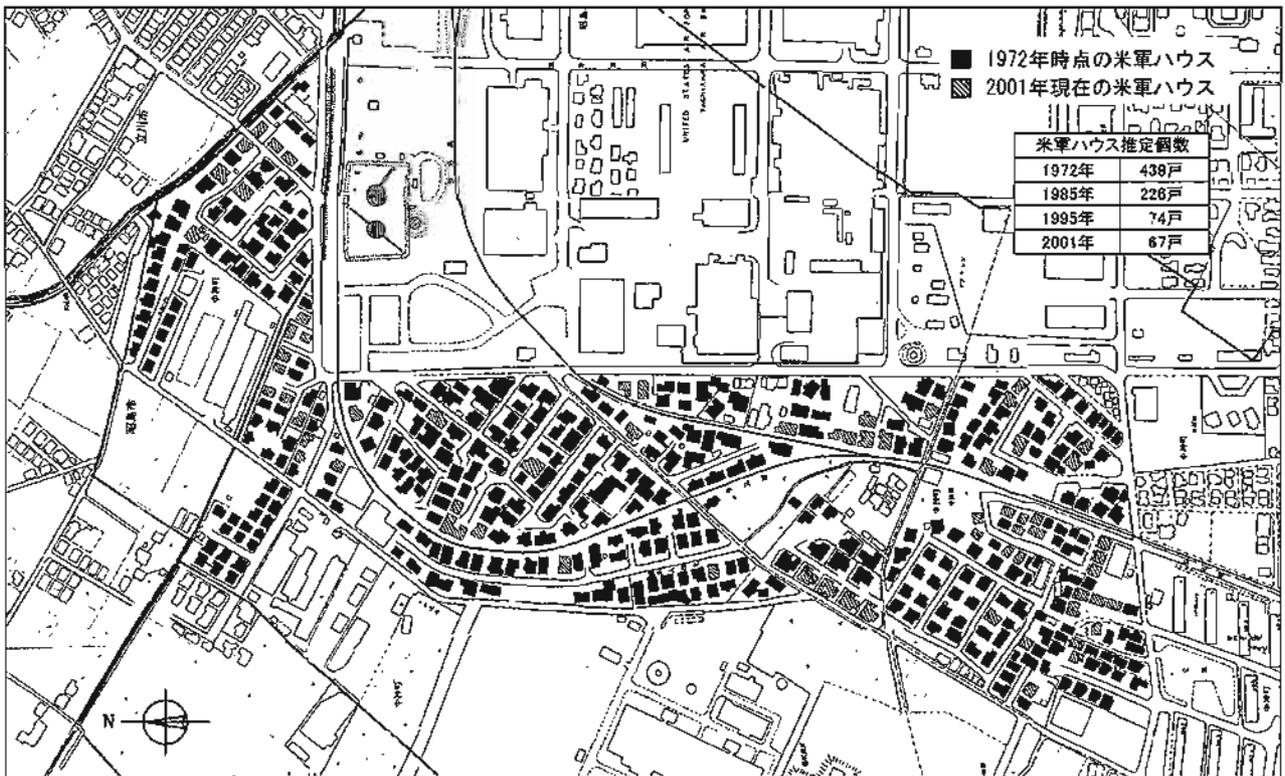


図2-5 中神町における住戸数の変遷

ものが図2-5である。1972年時点では、この地区で439戸の米軍ハウスは、1985年で226戸、1995年で74戸、2001年では67戸となっている。残存する住戸も老朽化が進む中、近年では急速な更新が進みつつある。

### 3. 米軍ハウスでの居住者の構築

#### 3.1 本稿での構築の定義

居住者の住要望には、増築や建物本体の更新によってのみ実現されるものと、日常の生活の範囲で居住者の行為のうち実現可能なものに分けられよう。たとえば、“土間の代わりにリビングの一角で靴を履き替える”、“洋室に置き畳を敷いて床座とする”、“洋式の浴室にス

ノコを敷いて洗い場を用意する”等の居住者自身の住環境に対する工夫やしつらえは後者に対する行為の表れであり、本稿ではこれを「構築」と定義する。そして、この構築という行為の側面から調査することで、表出されにくかった住要望までの抽出を試みる。

#### 3.2 居住者による構築

先に述べた8件の住宅について、増築・改築及び構築について住まい方の調査とヒアリングを行なった結果が表3-1である。特に米軍ハウスにおいては、玄関の構成と浴室・トイレの構成が、現代日本の一般的と思われる住宅とは異なっていると考え、この点についてはより注

表3-1 米軍ハウスにおける増築と構築

	no.	no.01	no.02	no.03	no.04	no.05	no.06	no.07	no.08
入居理由		アトリエを併用できる。	ホール中心のアメリカ映画のような住宅に対する憧れ。一般住宅にない個性的な雰囲気。	ベットの網を、外部に直結して工作など自由にできるリビングスペースがある。	賃貸のわりに簡易だが広い。リビング中心の簡易。	住戸の間隔が広く、周辺環境が良い。	庭が付いている。ベットの網を敷く。	広いリビング中心の間取り。	広いリビング中心の間取り。周囲のアメリカ的な環境。
居住年数		20年	2年	3年	18年	22年	23年	16年	3年
増築・改築		リビングの一部を玄関タタキに変更。				玄関のタタキを増築。	リビングの一部を玄関タタキに変更。	玄関のタタキを増築。	
玄関ドアの開き勝手		内開き	外開きに変更。(内開き網戸有り)	内開き(外開き網戸有り)	外開きに変更。(内開き網戸有り)	外開き網戸に変更。	外開きに変更。	外開きに変更。	内開き
玄関ドアの材質		木製フラッシュド	アルミ樹脂	木製戸	アルミフラッシュド	木製戸	木製フラッシュド	アルミ樹脂	アルミフラッシュド
内部タタキの有無		有	無	無	無	有	有	有	無
玄関ドアに関する構築		ドアの内側にレースのカーテンを吊った。					ドアの内側にレースのカーテンを吊った。	ドアの内側にレースのカーテンを吊った。	
上下足に関する構築			玄関戸の内側に土足用マットを敷き、下足箱も置いた。	(土足)					玄関戸の内側に土足用マットを敷き、下足箱も置いた。
その他 構築		玄関ドアに専用の子扉を付けた。			ホーチに人工芝を敷いた。ホーチのサイドは本椅子で囲って、下足箱を作った。			玄関タタキにクイルを敷いた。	
要望・意見		玄関スペースは必要に思う。玄関収納も必要である。	玄関スペースは必要に思わない。	以前は適当な場所を靴を履き替えていたが、別に不自由はなかった。	玄関スペースは必要に思う。	玄関スペースは必要に思わない。リビングが外部に直結しているのが良い。	置いて言えば、玄関スペースは必要に思う。	土間部分だけあれば良い。	置いて言えば、玄関スペースは必要に思う。
増築・改築		浴室部分を増築。				浴室部分を増築。	浴室部分を増築。		単独のトイレを増設。
便器の更新		無	無	無	無	有	無	無	無
洗面器の更新		無	無	無	無	有	無	無	有(ユニット洗面)
浴槽の更新		有(ポリ浴槽)	有(人造大理石)	有(ポリ浴槽)	有(ポリ浴槽)	有(ポリ浴槽)	有(ポリ浴槽)	有(ポリ浴槽)	有(ポリ浴槽)
入浴の方式		和風	洋風	洋風	和風	洋風	和風	和風と洋風	和風と洋風
入浴に関する構築		洗面の床にスノコを敷き、シャワーカーテンで区切って入浴する。	シャワーカーテンがあるが、ほとんど使わない。	シャワーカーテンがあるが、ほとんど使わない。	洗面の床にスノコを敷き、シャワーカーテンで区切って入浴する。				和風に合う時は洗い場用マットを敷く。
トイレ使用に関する構築		トイレの時は、サンクルを使用する。入浴時にトイレのウエスタンドアを敷く。	トイレの時は、サンクルを使用。		トイレの時は、サンクルを敷いて、兼用で使用。	トイレの時は、サンクルを使用	ドア横にスノコとケタを置いて、トイレの時に使用。来客用はトイレのそばにウエスタンドアを設置。	トイレの部分はマットを敷いて、兼用で使用	ドア横にスノコとケタを置いて、トイレの時に使用する。
要望・意見		子供が成長した現在は、浴室とトイレを分離したい。	浴室とトイレは、個室が良い。当たり前に感じる。	浴室とトイレは、個室が良い。広い空間が良い。	浴室とトイレは、別室でかまわない。共用はなれない。	浴室とトイレは、個室が良い。広い空間が良い。	浴室とトイレは、個室でかまわない。	浴室とトイレは、個室でかまわない。	浴室とトイレは、個室が良い。当たり前に感じる。
増築・改築		洋室2室を和室(続き間)に改築。	サンルーム・床室・キッチン部分を増築。床室部分は木製ベントに改築。		壁をビニールクロスに貼る変更。				サンルームと洋室を増築。
窓の更新		無(木製)	アルミサッシに変更	無(木製)	有	無(木製)	無(木製)	無(木製)	有
キッチンの更新		有	有	無	有	無	有	有	有
リビングの起居形式		混合	混合	イス座	混合	イス座	床座	床座	イス座
起居形式に関する構築		ヒースカーペットを敷く。	ソファを向もたれに使うことが多い。		ソファを向もたれに使うことが多い。	ヒースカーペットを敷く。	ヒースカーペットを敷く。	ヒースカーペットを敷く。	ヒースカーペットを敷く。
その他 構築		和室は、窓を閉めて換気扇を回して換気。	壁や窓は、自分の好みにペイントした。	壁や窓は、自分の好みにペイントした。	温気が出て、は寒の一部に置き畳をした。	壁や窓は、自分の好みにペイントした。	天井内に断熱材を設置した。	壁に木製タタキを敷いた。	足元のドアを全て交換した。
その他 構築		DKとLの間の壁を撤去し、カーテンを戻して床を部分的に使用している。	サンルームのドアを撤去し、カーテンを戻して部分的に使用している。	壁を大断熱に設置した。	取手のドアをカーテンに交換して、通気をとる。				
要望・意見		和室は無いほうが良かった。	アルミサッシは好まない。木製の窓を優先したい。	玄関戸は開けたままにできる理由で、内開きにこだわる。	リビングが北面して日当たりが良い。開口部はアルミの機能性を優先する。	アルミサッシは好まない。木製の窓を優先したい。	床の調子が強く、修繕したい。	玄関中心の間取りにこだわりたい。	開口部はアルミの機能性を優先したい。

凡例: 家主による増築や更新 (黒塗り) 居住者による構築や更新 (グレー塗り)

目して調査を行なった。

玄関のタタキは4事例が増改築によりすでに設置されており、下足生活の例を除いて、2事例が屋内にマットを敷き(写真3-1)、1事例がポーチを囲い込むことで靴脱ぎ場を構築し(写真3-2)、上下足の切り替えに対応している。玄関ドアは、7事例が外開きに変更されているが、そのうち3事例でドアの内側にカーテンを吊ることで、直接にリビングにアクセスすることに対して、視線の防御を図っている。これはエントランスの部分に対して単なる靴脱ぎとしての場だけではなく、内外部の干渉帯としての機能を求める内在的住要望の現われと言えよう。また、設立時の内開きドアには外開きの網戸が併置されており、ドア本体を開いての通気・通風の機能を有するが、これを外開きに変更した際にも2事例に網戸が設置されており、一般の日本家屋にはない玄関戸の通風という、既得の機能へのこだわりも読み取れる。

浴室周りについては、和風にも使用する5事例のうち、スノコやマットで床を構築するものが3事例で(写真3-3)、残りは床の構築無しで対応していた。トイレの部分については、上足生活の7事例すべてで敷物による床の構築やサンダル等の履物の使用が見られ、何らかのしつらえを行なっているが(写真3-4)、浴室とトイレを分離したいという要望は1事例しかなく、現況の環境へ順応した生活が感じられる。

リビングの起居では、米国風のハウスを好んでの居住者にして、完全なイス座の生活は3事例しかない。構築に関してはピースカーペットの設置や、ソファを背もたれに使うといった程度で、本来はイス座を想定したフローリングの床に無理なく対応している。内装の仕上げに関して、2事例でビニールクロスに貼り変えているが、他はペイントの仕上げのまま塗直しされている。これは、



写真3-1  
屋内の靴脱ぎ

写真3-2  
ポーチの靴脱ぎ



写真3-3  
浴室のマット

写真3-4  
洗面・トイレの敷物

居住者自身の手で為されている場合が多く、自主的な改装のし易い仕上げであると言えよう。その他、部屋のドアや小壁を取り払ってブラインドやカーテンで区切ること、部屋間のつながりを調整するものが3事例見られた。

開口部については3事例でアルミサッシへの更新が為されているが、他の事例ではカーテン以外の特別な構築は見当たらず、これは気密性に関わる重要な部材であるが、年代を経て機能の低下したものでも、比較的自然的に受け入れられていることが見て取れた。

全般を通して、米軍ハウスという個性的と思える居住空間に際して、玄関・浴室・リビングの各領域ともに、実際にはかなりの範囲で日本の一般的と思われる居住での形態を踏襲した生活がなされていることが理解できた。

### 3.3 建築的更新の有無による二事例の詳細

次に、大きな増改築の行なわれた事例と、ほとんど為されずに当時のままの空間を維持する典型的な事例について、具体的な構築の様子を図2-3に示し、住みこなしの現状を考察する。

#### (1) 増改築を行なっている事例 (no.02)

フロントヤード側に2室分の増築が行なわれているが、半分を洋室として、残りはリビングに繋げたサンルーム的な用途の部屋としている。キッチンについては、キッチンユニットと食器棚の部分が増床され、ダイニングが広げられた。各居室と浴室の壁・天井についても内装の仕上げが更新されており、すべての開口部についてもアルミサッシに変更されている。これらの家主による改築により、躯体は古いながらも賃貸物件としては一定の水準が維持されており、意識的住要望の満たされた事例である。居住者は上足の生活であり、玄関土間の代わりにサンルームを利用し、靴脱ぎ用のマットや下駄箱を置いたうえ、リビングとはカーテンで区切ること、ここを中庸的な空間として活用している。浴室は洋風に利用するが、設置されたシャワーカーテンの利用度は低く、トイレに関してはスリッパを置いて対応している。この浴室・トイレは一室の広い空間であることが気に入っているとの感想であった。ヒアリングからは、“アメリカ風の生活に対する選好”が強く感じられたが、実際の生活形態は浴室の使用以外は日本的な要素が強く、リビングにソファがあるものの背もたれ程度にしての床座が多いうえ、寝室にベッドを有するが、季節によってはフロアに直接布団を敷いての就寝も行なっている。

#### (2) 当時のままの空間を維持する事例 (no.03)

間取りの変更等の建築的更新は為されず、建設時の空間がそのまま維持されている事例である。居住者は当初、上足の生活であったが、土間がないため自然に下足のままの範囲が広がり、履き替えずに生活するようになっ

た。下足生活は調査事例の中でも唯一のものである。リビングには装飾用のオートバイを置いているが、ここは外部空間と連携した自由度の高い空間としてこだわを持っている。また、賃貸の物件にして猫を飼い、自作の棚等を多く作りつけたりして、自由に自分の好みに合わせた生活環境を得ることを最も重要視している。浴室はやはり洋風の使用で、洗い場は用いてはいない。トイレに関しては、一般にある閉鎖的に囲われた形は逆に不自然に感じるとの感想であった。米軍ハウスの形態をそのままに許容して生活する事例であるが、日本風家屋であっても、戸建で広ければ居住の対象に考えるとの興味深い意見があった。

両事例の居住者ともに、米軍ハウスを選んで住まうこと自体、かなり居住空間に対して自分なりのこだわりと嗜好を有する人に思うが、前者は玄関的な要素のサンルームを介して上下足を分け、屋内的に防御されたイメージのリビングで床座併用の起居をとり、比較的に日本の標準に近いと思える生活形態をとるのに対して、下足生活の前者はリビングがかなり外部に解放された使われ方をしている点で个性的であり、好対象の印象を得た。これらは、なかなか図面からは伝わりにくい雰囲気のところであるが、玄関という内外の中庸な空間が、対社会的な意味あい外部とのつながりを強く規定し、ここでの上下足の切り替えが日本的イメージの空間を構成するうえの重要な要素であると窺えた。

#### 4. 居住者の住要望と構築の関連

##### 4.1 アンケートの概要

居住者自身による住まいへの要望や評価を捕らえることを目的にアンケート調査を実施した。調査は2001年11月、直接配布・回収とし、不在の方に関しては留置きによる郵送回収とした。配布先として、現存する米軍ハウス自体が広範囲に分布して所在を確かめること自体が困難なため、協力いただいた居住者の情報を元に、調査

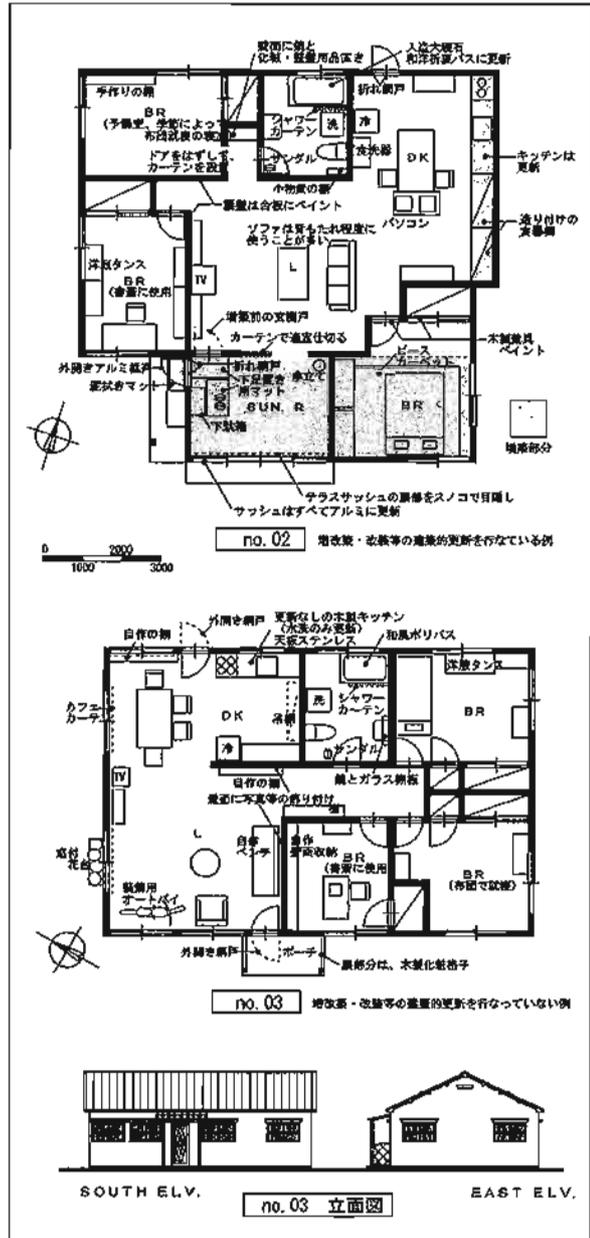


図2-3 具体的な構築の二事例

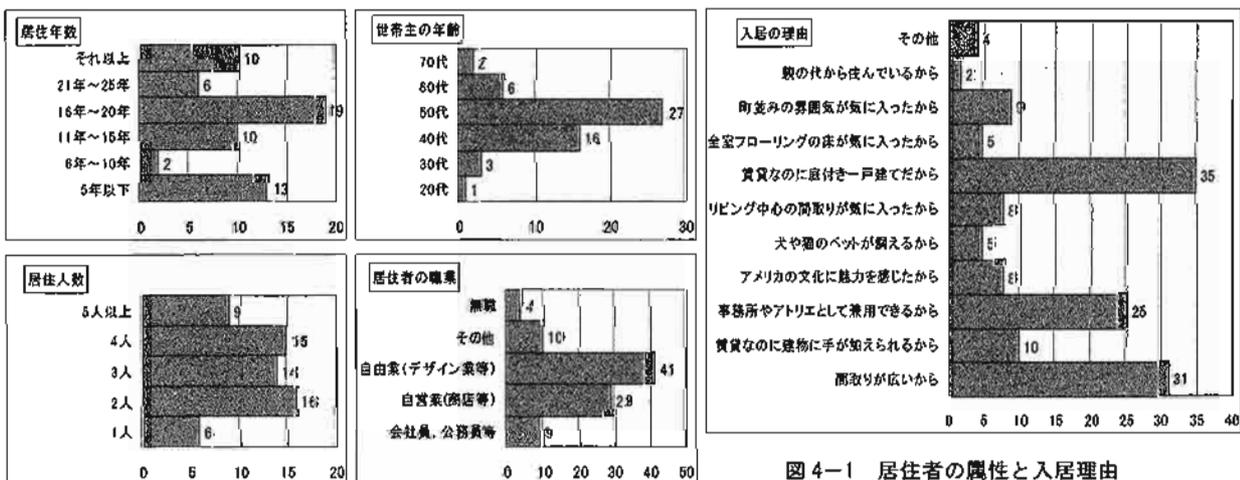


図4-1 居住者の属性と入居理由

の地域は立川市と昭島市を中心に一部の福生市まで広がった。これに加えて2002年7月、米軍居住者が主体となった文化展<sup>56)</sup>が開催された際に、来場の居住者からアンケートを募った。前者の総配布数は73、有効回収数40、回収率55%、後者の回収数は22で、合計数62である。主な調査項目は、採光の観点からのリビング周り、玄関の機能に関係する内容、浴室・トイレの使い分け等に関してである。

#### 4.2 居住者の属性と入居理由(図4-1)

居住年数では、平均で16.2年であり10年を超えるものが7.5割にも達し、賃貸物件としては定着が非常に長い。また、世帯主年齢の平均は52.7歳で50代が最も多く全体の約半数を占める。居住人数の平均は3.0人であり、子供が成人年齢に近い成熟した家族が多い。居住者の職業は<sup>57)</sup>自由業が44%、自営業が31%も占め、かなりの偏向が見られる<sup>58)</sup>。米軍ハウスという、個性的な居住空間に対しての嗜好と、居住者の職種に関連あろうことは興味深い結果である。

入居の理由は、「庭付き一戸建てだから」と「間取りが広いから」が最も多く、居住における接地性と物理的広さに対する要望は、やはり重要視されている。一方、「事務所やアトリエとして使えるから」も25例あるが、これは先ほどの職種にも関連しており、フロントヤードに対して開かれたリビングを持つ基本構成が、SOHO的な使用に適しているものと考えられる。

#### 4.3 建築的に特徴ある部位

次に、現代の一般住宅と比べて、建築的に特徴あると思える部位を表4-1にまとめた。配置(リビングの方位)に関して、北面にフロントヤードを有する事例が2.5割も占める。また、テラスサッシを有するのは半数程度に過ぎない。玄関内土間は4.5割が改築によって設置され、玄関扉についても6割は外開きに変更されており、玄関部分については日本人の居住に向けた改築が積極的になされている。これに対して、トイレを個室化している事例はわずか0.5割に過ぎず、浴室とトイレを一体とした

欧米的な構成は維持される傾向にある。

#### 4.4 居住者の意識的要望

つぎに、居住者の意識的な要望についてまとめたのが表4-2<sup>59)</sup>である。テラスサッシは約7割が必要と答えており、高い要望を示している。玄関周りについては、外開きの玄関扉、玄関内土間及び玄関ホールの要望が各々6割程度と過半数を占めるが、「どちらともいえない」がどれも2~3割程度を占め、その是非については意見の迷いが見受けられる。一方、内開き玄関扉は約2割の人が志向するが、土間やホールを不要とする意見は約1割と少数である。浴室については、西洋式での使用の要望は2割に過ぎず、半数以上が和式での使用を望む反面、トイレ同士の志向が7割、洗面同士の志向が5.5割も占めている。現在の日本の一般的な住宅において、浴室とトイレは分離するのが主流であることを考えると、これはかなり高い数値であるといえよう。さらに、洗い場を必要とする和風の入浴の志向が、浴室を独立させるという志向には直接連動しないことも理解できる。しかしながら、トイレや洗面の独立を望む意見も2.5割程あり、この点については要望の分かれるところでもある。洗濯機の置き場に関しては、浴室が約5割、洗面室またはキッチンが3.5割で、浴室と同室とする志向がやや高い。

#### 4.5 構築と意識的住要望や現状の建築の水準との関連

アンケートで得た、リビング廻り、玄関廻り、浴室・トイレ周りの各々の項目間の関連性を比較するため、クロス集計およびカイ二乗による独立性の検定を行った。この結果、相関があると認められた項目は表4-3に、その中で特に、居住者の構築と意識的住要望および実際の建築的な内容との具体的関連については図4-2に示した。

図4-2-1と4-2-2から、靴の履き替え場所や下駄箱の位置は、玄関内土間の有無に強い規定を受けることが理解できる<sup>60)</sup>。また、図4-2-3では、玄関ホールを必要とする要望は、靴の履き替え場所が土間のものより、玄関戸の外あるいは部屋の中とするものが強く、土間と

表4-1 建築的に特徴ある部位

リビングの方位		トイレの仕切り		玄関内土間の有無	
北東~北西	15 24%	浴室と同室	52 90%	有り	27 45%
東・西	19 31%	それぞれ程度	3 5%	無し	33 55%
南東~南西	28 45%	独立した個室	3 5%		
テラスサッシの有無		玄関扉の開き勝手			
有り	31 53%	外開き	38 61%		
無し	28 47%	内開き	19 31%		

表4-2 居住者意識的な要望

テラスサッシの要望		玄関扉の開き勝手		玄関内土間の要望		玄関ホールの要望	
必要に思う	39 71%	外開きが良い	33 57%	必要に思う	37 62%	必要に思う	33 55%
どちらともいえない	12 22%	どちらともいえない	13 22%	どちらともいえない	15 25%	どちらともいえない	20 33%
不要に思う	4 7%	内開きが良い	12 21%	不要に思う	8 13%	不要に思う	? 12%
トイレ仕切りの要望		浴室の形式の要望		洗面器の設置場所の要望		洗濯機の設置場所の要望	
浴室と一緒	42 68%	西洋式(浴槽で洗う)	12 20%	浴室と一緒でよい	34 56%	浴室と一緒でよい	30 53%
どちらともいえない	8 10%	どちらともいえない	15 25%	どちらともいえない	11 18%	どちらともいえない	7 12%
独立した部屋が良い	14 23%	和式(洗い場必要)	32 54%	独立が良い	16 26%	洗面室またはキッチン	20 35%

いう建築的対応がない場合に、これを補足する空間が望まれる傾向が読み取れる。対して、浴室の形式の要望に関しては、実際の使い方がほぼ要望を満たした形で実現されている（図4-2-4）。

これに加えて、靴の履き替え場所と浴室の使い方に対して、調査項目の全体的な影響を概観するため、それぞれを外的基準としての数量化I類分析を行った<sup>注10)</sup>（表4-4、5）。靴の履き替え場所が土間の有無に強い相関を受けるのは当然ながら、その要望はほとんど関係を持たない。一方で、浴室の使い方では、要望が使い方に直接に反映されており、床の構築もこれに相関していることが見て取れる。

総括して、米軍ハウスという欧米的な空間での日本人の居住において、上下足の切替えは“土間”の設置という建築的対応の規定を強く受けるのに対して、浴室の和風の使用はトイレと洗面が同室の構成のままでも、ほぼ対応できている現状が見て取れた。

## 5. まとめ

立川地区に民有地における米軍ハウスについて、建築

的な実態の調査と、ここでの居住者による住まい方から現代居住の要望について考察した。

これらのハウスの建設は、もともとは米軍兵士とその家族のための居住を目的に、基地内やGIIQの管轄する敷地内に計画的に進められたものであり、その内容は当時の欧米の空間構成と設備仕様を基にするが、建築工法については主として日本の伝統的工法や寸法体系に準じたものである。一方、その周辺地域においては不動産的な投機を目的とした民間の建築も多くなされており、本稿ではこれらを対象として扱った。この基本的な構成を以下に記す。

- (1) 配置において、フロントヤードから直接リビングにアクセスするが、これの南面が絶対条件となっていない。
- (2) 建物の平面系は単純な矩形であり、ほとんどの屋根は4.5/10の切り妻で建設されている。
- (3) 平面計画においては、DKとLが連続して計画され、ここから廊下で区切ることなく2~4の洋室を配している。
- (4) 浴室・トイレ等の水周りはバックヤード側の1室

表4-3 クロス集計結果

相関の認められた項目 (1%棄却で有意)	相関する項目の種類
リビングの方位 × 日当たりの満足度	建築×要望
玄関内土間の有無 × 靴の履き替え場所	建築×構築
玄関内土間の有無 × 下駄箱の位置	建築×構築
玄関扉の開き勝手の変量 × 玄関内土間の要望	要望×要望
靴の履き替え場所 × 下駄箱の位置	構築×構築
玄関ホールの要望 × 靴の履き替え場所	要望×構築
玄関内土間の要望 × 玄関ホールの要望	要望×要望
トイレの仕切りの要望 × 洗面槽の設置場所の要望	要望×要望
トイレの仕切りの要望 × 洗濯機の設置場所の要望	要望×要望
浴室の形式の要望 × 浴室の使い方	要望×構築
浴室洗い場の構築 × トイレ・洗面の床の構築	構築×構築
トイレ・洗面の床の構築 × トイレ・洗面の履物	構築×構築
洗面器の設置場所の要望 × 洗濯機の設置場所の要望	要望×要望

凡例：構築=実際の構築の内容、要望=意図的住要望  
(グレーの地は、構築と、要望または構築間の相関を示す)

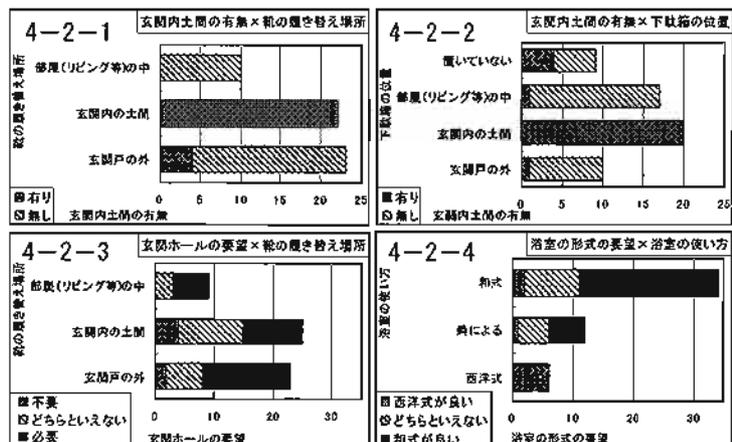


図4-2 項目相互の具体的な関連

表4-4 数量化I類分析結果(靴の履き替え場所)

アイテム	カテゴリ	度数	カテゴリ数	レンジ	偏相関係数
玄関内土間の有無	有り	20	0.32	0.55	0.55
	無し	27	-0.24		
玄関扉の開き勝手	外開き	30	0.08	0.05	0.12
	内開き	17	-0.05		
	外開き	24	-0.02		
玄関扉の開き勝手 の志向	どちらともいえない	13	0.34	0.28	0.28
	内開き	10	-0.14		
	玄関戸の外	8	-0.02		
	玄関内の土間	17	0.09		
下駄箱の位置	部屋の中	16	-0.13	0.28	0.28
	置いていない	6	0.13		
	玄関戸の外	4	0.18		
玄関ホールの要望	玄関内の土間	16	0.05	0.24	0.21
	部屋の中	27	-0.06		
	不要に思う	5	-0.02		
玄関内土間の要望	どちらともいえない	13	0.04	0.06	0.07
	必要に思う	29	-0.02		
合計		47			

重相関係数 0.80 重相関係数の2乗 0.65

(グレーの地は、レンジの値が0.50以上のものを示す)

表4-5 数量化I類分析結果(浴室の使い方)

アイテム	カテゴリ	度数	カテゴリ数	レンジ	偏相関係数
トイレの仕切りの 選好	浴室と一緒	29	0.03	0.27	0.17
	どちらでもいい	4	-0.28		
	完全に独立	11	0.02		
洗い場の床の構築	有り	28	0.18	0.50	0.43
シャワーカーテン の有無	無し	16	-0.32	0.21	0.21
有り	31	0.06			
トイレ・洗面床の 構築	有り	20	0.00	0.00	0.00
	無し	24	0.00		
トイレ・洗面の履物	有り	33	0.07	0.28	0.24
	無し	11	-0.21		
洗面器の設置場所 の選好	浴室・トイレと一緒	22	0.02	0.13	0.09
	どちらでもいい	9	0.06		
	浴室と別	13	-0.07		
洗濯機の設置場所 の選好	浴室・トイレと一緒	23	-0.10	0.24	0.19
	どちらでもいい	5	0.13		
	浴室と別	16	0.11		
浴室形式の要望	西洋式	6	-0.85	1.02	0.58
	時々による	12	0.05		
	和式	28	0.17		
合計		44			

重相関係数 0.69 重相関係数の2乗 0.48

に集中されている。

(5) 構造は主として日本の在来工法によるが、賃貸を目的とした理由とあいまって、その構造的な仕様は高いものと言えない。

居住者の住まい方については、玄関及び浴室・トイレに関係する構成が現代の一般住宅と異なるという視点から、ここに注目しての分析を行なった。日本の標準的居住スタイルである、玄関での靴の履き替えや、洗い場を必要とする浴室の機能を、もともとの米軍ハウスは有していないが、実際の居住においては、ほぼこの要望は成就されていた。しかし、玄関の機能についてみると、上下足の切替えという要望にตอบสนองして、土間の設置という建築的対応が多くなされているのに対して、浴室についてはほとんどが既存の空間のままに対応がなされている。さらに、前者は居住者の意識的要望としても必要と認められるが、後者に関しては現状を肯定する意見が多い。

このことは、将来的な住宅設計時の指針として考えるうえで、玄関の機能を有する空間は従来同様に必要とされるが、浴室に関しては欧米タイプの浴槽とトイレを1室に納める形式が普及しうる可能性を示唆するものと言えよう。近年、一般の居住空間においてもユニバーサルな計画の必要性が取り沙汰される中、日本の住宅においては、玄関の土間部分や狭小な面積のトイレは特に大きなバリエーションとなっているが、本研究での居住者の要望を探るスタンスは、これらの問題の解決の糸口となる可能性を有するものと考えられる。

最後に、本稿では結果的に見て持続性の高い空間を有する米軍ハウスを分析の資料としたが、これらの考察の背景には、既存のものとして与えられた環境への順応も少なからず影響を持つと考えられ、これらに関する検証は、次の段階の課題としたい。

#### 謝辞

住まい方の調査及びアンケート調査に関して、快くご協力いただいた米軍ハウス居住の皆様へ深く御礼申し上げます。

#### <注>

- 1) 本稿において立川地区とは、現在の立川市ではなく、立川基地周辺の米軍ハウスの存在する地域全般を示し、昭島市の東部地区を含んでいる。
- 2) 真境名らは文献 2) において、空間の物理的環境を直接形成する行動を総称して構築と規定している。
- 3) アメリカ軍技術者の下、約 60 人の日本人スタッフが属したとされる。
- 4) 米軍ハウス以外にも、日本家屋を改造しての外国人居住の住戸もありえるが、これを含めて推定した。また、外国人居住でないものでも、街区内の並びから隣接の外人住宅と同一時点の建設と推定できるものは、これを加えた。
- 5) 米軍ハウス仲間のミニアート展、2002.06.21~30、於：西

多摩郡瑞穂町「耕心館」

- 6) パートは除いて、家族内の就業者全員分について集計した。
- 7) 本文にも記したように、アンケート先に関しては協力いただけた居住者の情報を元に探し上げたものであるため、これが直接に母集団の姿を表出するとは言えないものの、もともとの資料数が小さく確定しにくい現状において、一定の傾向を分析できる資料ではあると考えた。
- 8) 収集できたアンケートデータ数が 62 と少なかったため、5 段階評定で得た回答等は、3 カテゴリー内に加工して集計した。
- 9) 全資料のうち、土足での生活者はわずか 2 組しかいなかったため、基本的には靴の履きかえを志向するものを前提として、この部分の分析はこの 2 つのデータを欠損扱いとして進めた。
- 10) 外的基準に関しては、ダミー変数を適用して、量的データとして扱った。靴の履き替え場所については、外的基準は 2 カテゴリーであるため、偏相関係数の結果は質的とした場合と同じである。浴室の使い方では、和式に 1、どちらといえないに 0、洋式に -1 のダミーを与えて、解析データ数を確保して分析した。

#### <参考文献>

- 1) 平成 8 年度建設白書、国土交通省、1996 年
- 2) 真境名達哉、服部岑生：密集市街地における外部空間の狭さの実態とその特性についての考察、日本建築学会計画系論文集、第 526 号、pp.123~129、1999.12
- 3) 喜田信代、本間博文、羽深久夫：キャンプ・クロフォード（占領軍真駒内基地）の建設概要について、日本建築学会北海道支部研究報告集、第 70 号、1997.03
- 4) 佐藤洋一、戸沼幸市：占領軍家族向け住宅地区に関する研究その 1：研究の概要及びグラウンドハイツ住宅地区の空間構成、日本建築学会大会学術講演梗概集、1993 年度 F.都市計画、pp.421~422
- 5) 諸隈直子、小川信子：沖縄の「米軍人向け貸し住宅」における日本人の居住実態について、日本建築学会大会学術講演梗概集、1991 年度 E.建築計画、pp.37~38
- 6) 田上健一、上江田常美、他：沖縄の米式住宅における再生の実態と居住者評価に関する研究、住総研研究年報、No.28、pp.191~202、住宅総合研究財団、2002.3
- 7) 青木正夫、船越正啓、他：台湾における米軍向け戸建て住宅の平面構成と住まい方（第 1、2 報）、日本建築学会大会学術講演梗概集、1988 年度 E.建築計画、pp.25~28
- 8) 小泉和子、高藪昭、内田青蔵：占領軍住宅の記録（上、下）、住まいの図書館出版局、1999.2
- 9) Engineer Section FEC：DEPENDENTS HOUSING
- 10) 立川市役所 編：立川基地、1972
- 11) 山下和正 監修：近代日本の都市型住宅の変遷、都市住宅研究所、1984.02、(原典、住宅金融公庫 編：木造住宅平面図集、1951)
- 12) 住宅地図 昭島市、住宅地図出版社、1972.11

#### <研究協力者>

平成 13 年度  
大坂崇徳 工学院大学大学院修士課程  
鱒坂誠之 工学院大学大学院修士課程  
平成 14 年度  
谷口健 川崎医療福祉大学学部生  
河口明美 川崎医療福祉大学学部生